

## 梵網經と阿含部梵網經についての試論

白 土 わ か

梵網經は、いくつかの先行諸經論の影響をうけて、五世紀前半頃、中国で成立したものと推定されるが、とくに、阿含部の梵網經とは如何なる関連をもつものであるかを考えてみたい。それは、題名が同じであるという素朴な質問に始まるが、その系脈をさぐってみることは、大乘戒經たる梵網經の性格を位置づける上に、たしかな問題を提示しているものと思われるからである。

### 一

まず、梵網經成立の上に影響を与えたとみられる諸經論は、華嚴經、涅槃經、菩薩地持經(瑜伽師地論菩薩地の抄訳)、優婆塞戒經、菩薩内戒經、菩薩善戒經、仁王般若經、中論、大智度論、阿含部の梵網經等があるが、その中、華

嚴經は、智顛によって、梵網經結ニ成華嚴經一といわれたほどであり、梵網經が、經典としての結構や舞台を華嚴經に負うところは大きい。即ち、蓮華台藏世界は華嚴の蓮華藏世界の類型であり、その教主はともに盧舍即仏であり、その説処は、華嚴の七処八会に類似し、又、上卷の菩薩心地の階位は、華嚴經の菩薩の階位に近いものがある。又、菩薩心地四十心中の第三十心以下には、華嚴の相即相入を思わせるものがある等である。

梵網という經題について智顛は梵網經義疏に

此經題名ニ梵網一、上卷文言、仏觀ニ大梵天王因陀羅網一、千重文綵不ニ相障礙一、為説、無量世界猶ニ網目一、一一世界各各不同、諸仏教門亦復如レ是、莊ニ嚴梵身一、無レ所障礙、從レ譬立レ名、一部參差不同如ニ梵王網一也。

といっている。上巻の文言とは、梵網經上巻の意味であるが、現行の梵網經の上巻には該当するところなく、現行本では下巻の始めに

時仏觀諸大梵天王網羅幢<sup>一</sup>因為說、無量世界猶如<sup>二</sup>網孔<sup>一</sup>、一一世界各各不同別異無量、仏教門亦復如是。

とあるのを指しているものであるが、このように上巻と下巻とに混同があるのは、梵網經の下巻の途中から戒本として用いられた事があるために、その前の部分を上巻として取り扱ったものなのか、あるいは現行本とは別の本があったのか、何れにしても形態の煩雜さをもっている經典である。さて、梵網という経題の由来を、前掲の經文に求めるのは妥当であるが、智顛は疏の文の中で、梵網を大梵天王の因陀羅網といっているのは思い違いであって、因陀羅網は帝釈天の網のことであって、ここは梵天の網をさしているわけである。では何故このような混同が智顛の疏の中になされたのであるか。そこには、華嚴經の因陀羅網からの連想があったのではないであろうか。因陀羅網は、華嚴經の中で、一切法界の不同差別を叙述するのに度々つかわれる表現である。千重文綵不相障闕とは、帝釈天の宮にかかると因陀羅網の様子であるが、相障闕せずといい、又、梵身を莊嚴して相障闕せずともいふのは、のちの華嚴教學の重

々無尽を思わせるもののあるのは、如何に理解すべきことなのであろうか。そして又、一一の世界は各々不同なること、その網目の如く、仏教の門も亦かくの如しと智顛も述べているが、梵網經では、梵天の網羅幢の網孔の如く無量の世界はあり、その世界の不同別異無量なる如くに、仏教の法門もありといっている。梵網の喩によって、一旦、無量世界の相を叙述するところは、やはり華嚴經の因陀羅網の叙述の仕方を踏襲しているように思われる。併し、梵網經では、無量法界と出しておきながら、それを教法に更に喩えているのは、華嚴經を出ているということができらるであろうか。梵網經のやり方は、よく、そういうことがみられるのであって、他の経論の著しい影響を受けているのであって、いつも、それを越えているのである。

法藏は、この梵網に関して梵網經本疏に

問、此中梵網与<sup>一</sup>華嚴中因陀羅<sup>二</sup>何別、答、彼是帝釈網、此是梵王網、彼網在<sup>レ</sup>殿、此網在<sup>レ</sup>幢、喩意亦別、彼取<sup>三</sup>宝珠<sup>一</sup>成<sup>レ</sup>網、互影相影現、弁<sup>三</sup>重重無<sup>二</sup>尽<sup>一</sup>、此取<sup>三</sup>網孔差別不同義<sup>一</sup>故為<sup>レ</sup>異。

と、梵網と因陀羅網とを対比させている。それは、梵網というならば、華嚴の因陀羅網が連想されるということ在意味するが、しかし、その両者は別なものであって、華嚴は

因陀羅網によって表わされ、一方は梵網によって語られるものである。華嚴の因陀羅網は、互いに相影現しあう重々無尽を示すものであり、梵網は差別不同の義を示すものと、法蔵はいっている。又、法蔵の疏には、つづいて

網有三義、一喻菩薩戒相塵沙微細差別、交雜出沒屈曲難知如網孔也、二喻此律儀戒功能、遮防有情令不作惡如網籠羅也、三喻此戒、攝善救生二種功能滂漉自他俱出離故、是故此中梵亦網持業積也<sup>⑥</sup>。

と、網について述べているが、これは梵網經の網についての論である。華嚴經の網についてはない。網が、梵網經の菩薩の無量の差別ある戒相を示すこと、この戒が網の如く有情の悪をからめとって悪を作さしめざること、又この戒が、網がひたしこすように、自他の悪を救いとり、出離せしめるといふ、梵網戒の機能についての喩となつてゐる。華嚴經の網の字の用例はきわめて多いが(註⑦別表参照)、宝網とか光明網とか因陀羅網とか、法界の莊嚴や無量差別ある世界の形容に使われていることが多い。又、数多い華嚴經の網の字の用例の中に、梵網の用例は一度もない。いわゆる華嚴教學の重々無尽是因陀羅網によって喩えられるのであり

一切諸仏智慧分<sup>ニ</sup>別一切法界如<sup>ニ</sup>因陀羅網<sup>ニ</sup>悉無<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>余(仏不思議法門)<sup>⑧</sup>。

が、より所とされ、華嚴の因陀羅網は一切法界の喩として考えられていたのであり、一方の梵網は、法蔵もいふ通り、戒の教學についての譬喩として扱われているのである。ただ華嚴經入法界品の一部に、

張<sup>ニ</sup>大教網<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>亘<sup>ニ</sup>生死海<sup>⑨</sup>。

と、教を網にたとえるのがわずか一箇所あるが、梵網經が、教を網にたとえ、法蔵がまた、網によって戒の教相を説明しているのは、華嚴經によつたのでなく、梵網經独自のやり方であると理解してよいかと思う。

従つて梵網經の経題、梵網は、華嚴經に数多く使用される網の中、とくに因陀羅網から類推したものと理解される一方、全く華嚴經にのみよつたものではなく、そこに別の要素が考えられるのである。智顛においても法蔵においても因陀羅網と梵網とが対比されるのは、帝釈天と梵天とが、対のものとして經典にも度々出ていることから、自然そつたのであろうが、梵網經は華嚴經に多くよりつつ、全くそれによるのではないことを注意したのである。こころみに、經の説処や舞台等の構造は非常に類似してゐる、大乘戒そのものにおいては、華嚴經より受けるところ

は殆どないのである。

梵網という経題のことからして、華嚴経との関係を、煩雑にのべてきたのであるが、ここで、阿含部梵網経との関連を考えてみることにする。阿含部梵網経は、長阿含経第十四の梵動経（仏陀那舎、竺仏念訳、AD 399～415 訳出）と、梵網六十二見経（支謙訳、AD 223～253 訳出）とは同本異訳であるが、パーリ文は D. N. I. Brahmajāla sutta である。長阿含の梵動経は誤りで、梵網経が正しいと思われるので、支謙訳の梵網六十二見経を、ここでは阿含部梵網経として直接の対象とすることとする。梵網六十二見経では末尾近くに

合皆在是六十二見、往還其中、於彼住在、厥中行死不得出、仏言、譬如工捕魚師、若捕魚弟子、持罾目網下著小泉中、下以便前任若坐、其人念言、水少諸魚浮游、皆上網上、往往在其中不得出

と、異道人が六十二見中に入って、出ることができないことを、魚が細目な網の中に入って出ることができないようなものだとたとえ、又、この経を何と名づくべきかというのに対しては、異道人が入って出られぬ六十二見が羅網にたとえられるのに対して、法網、見網、梵網と名づくべきであるといっている。外なる戒行より、内なる法、内なる

正見を重んじ、六十二見についても、くわしく説くところのこの經典が、かく名づけられるわけである。梵動経では、それらが義動、法動、見動、魔動、梵動とよばれている。この動とは、jāla と cara とが混同されて、網が動になったのであろう。ともあれ、梵網六十二見経という梵網は、六十二見についての、正しい理解の仕方を示す法の網なのである。

ここに、大乘梵網経の経題、梵網とは、華嚴経の因陀羅網の觀念と、阿含部梵網六十二見経に示される法網との両様のものを具えていると理解したのである。

## 二

梵網六十二見経は、戒について触れているのであるが、異道人須臾とその弟子梵達摩納が、仏と法と比丘について議論し、須臾はこれを謗り、梵達摩納は、ほめたたえた。そのことを釈尊がきかれ、少知なる者は、戒行によって仏を嗟嘆するものであり、多聞なる者は、仏の内なる深妙の法によって仏を嗟嘆するといわれたという。梵動経では、小縁、威儀、戒行によってのみ、凡夫は仏を嗟嘆するといっている。パーリ文の方では、「凡夫は、ただ瑣細の事について、卑近の事について、ただ戒に関する事についての

み如来を讚嘆する」といい、瑣細にして卑近なものとされる戒を、小戒、中戒、大戒の三種に分けて説明している。漢訳では区分せずに戒について説いているが、戒を瑣細なること、小縁威儀といっていることは、注目すべきことである。ここにあげられている戒は、不殺生、不取他人財物、不妄語、不両舌、不罵詈、不惡口、不欺言、不坐高倚好牀、不著香花、不聽歌舞、不飲酒、不著金銀珍宝、食不失時、不受男女奴婢、不絶生穀、不受鷄羊猪、無有舍宅、不市買、不行斤斗尺欺侵入、離於刀杖撻捶恐怖人、貪著食等をはじめとするものであって、異道人は、これらの戒において誤りを犯すが、沙門瞿曇にはこの事なしと云って、異道人の弟子梵達摩納は仏を讚嘆し、須臾は、この事において仏を謗るといっている。而して、少知なる者は、不多聞の者は、この戒に於て、仏に對し毀譽するところあるが、賢者なる弟子は、仏の深妙の法に於て仏を嗟嘆する。深妙の法とは、異道人の陥っている六十二見を、仏はみなこれ知りつくし断じつくしている事をいうのである。異道人は、六十二見の真相を知らず、これに著しているが、それは羅網の中に入ってしまつて出られない魚のようなものであるという。そして、六十二見について、くわしく述べられていて、それが仏の深妙の法であるといわれている。

このことは、異道人は六十二見に陥つていて、正しい見解も持ち得ぬのに、外なる小縁、威儀、戒行に目を覆われて、それによつてのみ、その人の宗教的価値を云々しようとするものであるというのであろう。この經典では、一見、戒を卑近にして些細なことと貶しているようであるが、その真意は、内なる正しい見解もなしに、外にあらわれた威儀戒行のみ云々することを誠しめていたのであって、正しい戒そのものが、卑近なること、些細なることと解すべきではないのであろう。正しい見解を得ることこそ仏教の目的であることは、いつも変りはない。ただ外なる戒行は、その内なるものによつて裏づけられていなければ、戒行の眞の価値はないことを意味するのであろう。もし戒が些細なることにすぎぬなら、釈尊はあれほど戒をしばしば説かなかつたであらうからである。

この經において、外なる戒行よりも、内なる正しい見解の樹立こそが、まず要求されたが、次に、異道人にも問題にされるこの經の戒の性格を考えてみる必要がある。この經にのせられている戒は、律部の四分律等にも入っているものではあるが、仏教者のみならず、他の異道人にも問題になるという、共通の場をもつていることに注意すべきであらう。梵網六十二見經にあげられたような、最も根本的

な、宗教者に要請されるいましめは、単に仏教教団内にとどまることなく、一般の宗教者にとつての関心事でもあったということである。この戒の普遍性が、この經典の示している興味深い点であつて、この普遍性は、戒が原始仏教教団や、部派仏教教団の範圍を越えて出てゆく原点を示している。

仏教史上でいう十事の非法の問題も、戒の普遍性を基点としての論争であつた。伝統的な仏教教団の枠をこえて、戒が宗教者として守るべき生活規範としての、普遍性と一般性を要求するとき、戒は大乗戒となり、在家戒となつて展開した。

阿含部梵網經の立場を、以上の点から理解するならば、その系脈を受けるものは、ひとり大乘の梵網經にのみとどまるものではない。大乘經典の中に散説されている戒も、大乘戒經といわれる經典の類も、何らかの意味で、その系脈につながるものであるが、まず、菩薩内戒經をとりあげて考察してみたい。

菩薩内戒經は、菩薩内習六波羅蜜經を拡大した經典であるが、菩薩の戒の根本に、六波羅蜜をおき、それを菩薩の内戒であるとする。

菩薩戒<sub>レ</sub>内不<sub>レ</sub>戒<sub>レ</sub>外也、外行如<sub>レ</sub>地、内戒如<sub>レ</sub>水、水以<sub>二</sub>

清淨濡軟<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>行、地以<sub>二</sub>多容多受<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>功德<sub>一</sub>也、一切百草樹木皆從<sub>レ</sub>地生長、一切万物皆從<sub>レ</sub>水得<sub>レ</sub>生活<sub>一</sub>、是故菩薩功德如<sub>レ</sub>地如<sub>レ</sub>水<sup>⑧</sup>。

と、菩薩は外を戒めるよりも、内を戒めるべきこととし、その内戒は六波羅蜜を根本とする菩薩行であるという。外行は、これによって支えられ、而して、菩薩の功德は、内と外との二があることになっている。しかし、この内なるものの重視は、阿含部の梵網經を思わせるものがある。そこに系脈を見ることができないものであろうか。又、菩薩内戒經では、戒として四十七戒をあげている。これは外行であり、内戒は波羅蜜であるが、この四十七戒中のいくつかは、梵網戒の中にとり入れられている。菩薩内戒經と梵網經との関連は、その他

殺盜淫、身自不<sub>レ</sub>殺不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人殺<sub>一</sub>、身自不<sub>レ</sub>盜不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人盜<sub>一</sub>、身自不<sub>レ</sub>淫不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人淫<sub>一</sub>……兩舌惡口妄言綺語、口自不<sub>二</sub>兩舌<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人兩舌<sub>一</sub>……<sup>⑨</sup>

とあり、自ら殺さず人に教えて殺さしむるを得ずというように、自らのみならず、人に教えて悪事をなさしむることが戒めであるが、これは四分律にすでに見えてはいるが、とくに他への配慮として、梵網戒に受けつがれている。

又、菩薩内戒經で注目すべきことは、在家の菩薩の問題

である。

菩薩山居独处亦不<sub>レ</sub>恐懼、菩薩雖<sub>レ</sub>居家畜<sub>レ</sub>養妻子、常如<sub>レ</sub>独恬然安定、無<sub>レ</sub>復痛痒思想之念<sup>⑧</sup>。

とは、正しく在家の菩薩であつて、この經に説かれているのは、出家在家を通じての菩薩の爲の戒であることとなる。四十七戒中に、売買のための戒が多いのは、在家戒の特徴である。菩薩内戒經にせよ、梵網經にせよ、在家戒をふくむことは、それが大乘戒である所以であるが、戒が仏教教団の内部にのみ止まるものではなかつた事を意味して、先述の阿含部梵網經の立場の展開と理解されないであらうか。

出家の菩薩、在家の菩薩ということは、菩薩地持經や、優婆塞戒經にもいうことである。その中、優婆塞戒經は、在家の仏教信者すなわち優婆塞のための戒を説く經典であるが、優婆塞が在家の菩薩として登場するところに、大乘戒たる面目があるが、この經典は、阿含部の善生經の進展したものである。善生經には、長阿含一六の善生經、中阿含一三五の善生經、尸迦羅越六方礼經(安世高訳)、善生子經(支法度訳)、六方向拝經(竺法護訳)等があり、パーリ文は、D. N. 31 Singalovād sūta である。

長阿含の善生經によると、長者子善生が、父の遺教によ

つて六方を礼拝していると、釈尊がこれを見られて、賢聖法においては、六方を礼して恭敬をなすことはせず、四結業(殺生・盜竊・姪逸・妄語)と四惡行(欲・恚・怖・癡)と六損財業(酒に耽湎すること・博戯・放蕩・伎楽に迷うこと・惡友を相得ること・懈墮)を離れることを六方を礼すというのである。又、四怨(畏伏・美言・敬順・惡友)、四親(止非・慈悲・利人・同事)および六方(東父母・南師長・西妻婦・北親党・上沙門婆娑門・下僮僕)に親しむべきことをあげて誠しめとされるのであるが、長者子善生は、ここにおいて、正法中に於て優婆塞たることを許されよ、形寿を尽くして五戒を守るべしというのである。この經典は、優婆塞戒經に展開している<sup>⑨</sup>。

長者子善生が、仏に向つて、外道六師は、六方を敬礼すれば命と財とを増長すると教えるが、仏法にもまたかくの如きことありやと問うたのに対して、仏は、仏法中における六方は六波羅蜜であること、六波羅蜜は菩薩の行であること、菩薩に出家と在家の二種あることを説く。そして出家の菩薩は八重戒を、在家の菩薩は六重戒を持すべしといひ、菩薩道についてもくわしくのべている。優婆塞たる在家の菩薩は受戒にあたっては、先ず三帰五戒を受け守り、四惡報(貪・瞋・癡・恐怖)、五处、五事、三事、二事等

の遠離が守られ、然るのちに、六重法（不殺生戒・不偷盜戒・不虛說戒・不邪淫戒・不說四衆過戒・不酤酒戒）と二十八失意罪とを受けるべきことを説いている。六重法、二十八失意罪の内容は、阿舎の善生經と同じものではないが、善生經の四結業、四惡行、六損財業等は、戒としての性格を持つものであり、外道の六方礼に代るべき正法として示されたものである。その正法を示された事によって、善生子は優婆塞となり、五戒を受ける事を志すのであるが、五戒とともに、仏教者の心得として、善生子に与えられたものである。優婆塞が五戒の他に心得として守るべき戒があるということ、これは伝統的に受けつがれた優婆塞戒としての、五戒を守るといふ形式からは、はみ出したものであり、求められた仏教の宗教的普遍性ともいふべきものが、そこにあるようである。これは先述の阿舎部梵網經の問題にも通ずるものがある、これが、伝統的教団の戒律の枠をこえて、在家戒もしくは大乘戒となつていったものではなかつたのであろうか。善生經のそれは優婆塞戒にうけつがれて、五戒の他に、正しき優婆塞戒として六重二十八失意罪に展開したのであろう。

優婆塞戒經の六重法は、梵網經の十重禁戒中の前の六重戒に入っており、梵網四十八輕戒中にも十一カ所ほど入っ

ていて、梵網戒にも在家戒としての性格があることを知るべきである。六重禁戒の第五の不酤酒戒は明らかに在家戒である。酒を酤ることによって人に罪を犯させないという大乘の利他の立場に立つものではあつても、在家戒の性格をもつものとみるべきであらう。

### 三

梵網經は、前述のように、多くの經論の影響を明らかに受けて成立した經典であるが、このようにして中国で成立したということは、五世紀前半までに中国に將來された大乘戒經や、大乘經典中に散説されている大乘戒を整理、統合する必要から作られたものといふべきであらう。ただ、整理し統合するといつても、単なる統合ではなく、そこには梵網經独自の立場に進展し、独自の主張をもつてゐることをみる。それが、大乘戒經中の随一といわれた理由であらうが、先行諸經論を、包みこみ、それを越えているのである。

梵網經が大乘戒として成立した基盤は、菩薩内戒經、優婆塞戒經、涅槃經等の經典の大乘戒に受けつがれた、阿舎以来の、戒の普遍性が、この梵網經にも受けつがれてゐるとみるべきであらう。伝統と形式から、はみ出してくる普



婆塞戒經、菩薩內戒經、菩薩地持經、涅槃經等の戒となつた。梵網經は、これら諸經典の中の戒を統合受容しつつ、遠く阿含部梵網經の精神をうけついで、梵網戒独自の展開をなしたげたのである。

優婆塞戒經は善生經ともよばれて、明らかに阿含部善生經の展開であつた。阿含に、慣習法ともいへべき大乘戒の根拠を求めることを、梵網經の作者も、これを意識していたのではなかつであらうか。多くの大乘經論をとり入れながら、又、經の結構や舞台には、華嚴經によるところ多くして、その題名も、華嚴經の因陀羅網を連想させるものがありながら、大乘戒としての本質をつきとめてゆくととき、遠く阿含の梵網六十二見經が、梵網經作者の意識にあつたと思ふのである。

註

- ① 大正藏經三四卷一二八頁a、法華文句第九下
- ② 大正藏經二四卷一〇〇二頁c、梵網經上卷  
而能轉<sub>ニ</sub>魔界<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>仏界<sub>一</sub>、仏界入<sub>ニ</sub>魔界<sub>一</sub>、復轉<sub>ニ</sub>一切見<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>仏見<sub>一</sub>、仏見入<sub>ニ</sub>一切見<sub>一</sub>、仏性入<sub>ニ</sub>衆生性<sub>一</sub>、衆生性入<sub>ニ</sub>仏性<sub>一</sub>、
- ③ 大正藏經四〇卷五六九頁a
- ④ 大正藏經二四卷一〇〇三頁c
- ⑤ 大正藏經四〇卷六〇四頁b
- ⑥ 同

⑦ 華嚴經における網の字の用例(六十華嚴による。数字は出てくる頻度数)

- 宝網 二五、光明網 一二、摩尼宝網 一〇、因陀羅網 八、大光明網 八、疑網 七、金鈴網 六、大光網 六、香網 五、羅網 五、愛網 三、華網 三、金鈴宝網 三、邪見網 三、想網 三、白宝網 三、因陀網 二、因陀羅網 普智光明菩薩 二、紺宝網 二、宝網 二、白淨宝網 轉輪王 二、仏刹網 二、綬網 二、網 二、網羅 二、一切仏世界網 一、一切方網 一、一切方門光明網 普法界摩尼 一、一切如来自在光幢摩尼王網 普覆周羅菩薩 一、因陀羅網 世界 一、雲網 一、衣網 一、海藏珠網 一、月摩尼網 一、疑網 地 一、華網 海 一、堅固光明真珠寶網 一、香像網 一、香宝網 一、金網 一、三昧正受網 一、師子吼網 一、色光明網 一、赤真珠寶網 一、須弥山城網 一、衆苦網 一、衆宝山網 一、衆宝像網 一、衆華宝網 一、衆宝網 一、衆妙宝網 一、諸事幻網 一、青瑠璃摩尼宝網 一、清淨宝網 光明 一、莊嚴藏摩尼宝網 一、莊嚴網 一、淨光明網 一、淨光明網 一、真珠寶網 一、真珠網 雲 一、雜衣宝網 一、雜網 一、大願網 一
- 大教網 一、大光網 雲 一、大莊嚴妙光明網 一、大智網 一、大宝光明網 一、大摩尼網 一、智慧網 一、張網 一、珍宝蓋網 一、天網 一、顛倒惑網 一、日藏摩尼宝網 一、入因陀羅網 陀羅尼門 一、如意宝王網 一、如意宝網 一、白淨宝網 一、白淨宝網 轉輪聖王 一、白網 一、不可壞大功德網 一、不可壞幢摩尼宝網 一、仏莊嚴光明網 一、放離垢歡喜光明網 一、宝炎網 一、宝玉網 一、宝華網 一、宝光明網 一、宝網 嚴身仏 一、宝網 藏

- 一、煩惱網 一、煩惱惑網 一、摩訶曼陀羅華網 一、摩尼王網 一、摩尼華網 一、摩尼宝藏王妙光明網 一、鬘網 一、妙光明網 一、妙德藏摩尼宝王網 一、妙宝王網 一、妙宝光明網 一、網雲 一、網衣 一、網蓋 一、網形 一、網取 一、網網 一、夜光宝炎網 一、欲網 一、離垢摩尼宝藏網 一、鈴網 一、瑠璃宝網 一、蓮華網 一、
- ⑧ 大正藏經九卷五九七頁、華嚴經卷三二  
 ⑨ 大正藏經九卷七七三頁c 華嚴經卷五八  
 ⑩ 大正藏經一卷八八頁  
 ⑪ 大正藏經一卷二六四頁  
 ⑫ D. N. I, p. 1  
 ⑬ 大正藏經一卷二七〇頁c  
 ⑭ 大正藏經一卷九四頁a  
 ⑮ D. N. I, p. 3 Appamattakam kha panīetam bhikkave oramattakam silamattakam yena puthujano Tathāgatassa vaṇṇaṃ vadamāno vadeyya.  
 ⑯ 大正藏經二四卷一〇三一頁c  
 ⑰ 大正藏經二四卷一〇二九頁b 四十七戒參照。その中梵網戒に入っているのは、五者菩薩不得飲酒 六者菩薩不得兩告。
- 二十八者菩薩不得重称侵人、二十九者菩薩不得持輕称欺人、三十者菩薩不得持大斗侵人、三十一者菩薩不得持小斗欺人、三十二者菩薩不得持長尺侵入、三十三者菩薩不得持短尺欺人。四十者菩薩不得壳經法。
- 梵網戒では、第五輕戒、第十九輕戒、第三十一輕戒、第三十二輕戒中に入る。
- ⑱ 大正藏經二四卷一〇三〇頁a  
 ⑲ 同一〇三一頁c 一〇三二頁a  
 ⑳ 大正藏經一卷七〇頁  
 ㉑ 大正藏經二四卷一〇三四頁a 1  
 ㉒ 梵網四十八輕戒中の第七懈怠不聽法戒、第九不看病戒、第十三誘毀戒、第十六為利倒說戒、第二十一瞋打報仇戒、第二十二憍慢不請法戒、第二十三憍慢僻說戒、第二十八別請僧戒、第三十二損害衆生戒、第三十七冒難遊行戒
- ㉓ 大正藏經二四卷一〇三三頁c  
 ㉔ 日本大藏經一八、五〇頁、梵網經略抄卷下  
 ㉕ 卍統藏一・六〇・四、梵網經合註  
 ㉖ 大正藏經一二卷六四五頁c 一六四六頁a、涅槃經邪正品 (本学助教、仏教学)